

熱風の日本文学

第33回 オリンピックの東京改造 (昭和)

1964 (昭和39) 年10月10日から2週間、アジア初のオリンピックが東京で開催された。日本史上初めての世界的ビッグイベントは、貧弱な都市交通や生活環境など多くの問題を抱えていた東京を一挙に改造する千載一遇のチャンスだった。総投資額約1兆円 (国の歳入で比較すると、現在のおおよそ33兆円) のうち、大会の直接費用は1%程度で、残りは都市基盤整備に使われた。

「一九五〇年代初め (昭和二〇年代末期) の東京は急増する人口、都市の膨張に対して都市のインフラ整備がきわめて立ち遅れ、都市計画の専門家の間では危機意識も芽生え始めていた」 (越澤明「東京都市計画物語」)

安保闘争が終結した60 (昭和35) 年7月に登場した池田勇人内閣は「所得倍増」政策を掲げた。「政治の季節」は終わり、高度成長の「黄金の10年間」が始まる。その跳躍のための力は50年代から徐々に蓄えられていた。52 (昭和27) 年に12万台だった東京都内の自動車登録台数は58 (同33) 年に40万台を突破。62 (同37) 年には倍の80万台を超えるまでになった。急激な車社会の到来に道路整備が追いつかず、都心部は慢性的な渋滞が起きていた。

55 (同30) 年12月、「首都高道路生みの親」といわれる兼腕の元内務官僚・山田正男が東京都に招かれ、都市計画の最高責任者となる。山田は65 (同40) 年には東京の都心部の交通は完全にマヒするという「昭和40年危機説」を唱えた。鉄道も深刻な状況にあった。郊外人口の増加で、都心部に乗り入れる国鉄私鉄の通勤電車の混雑は殺人的なものになっていた。交通のほかに、膨れあがった「大東京」は、いたるところでさし始められていた。大問題だったのが水である。多摩川水系の淀橋浄水場 (都庁などがある現在の西新宿一帯) での上水供給は限界にきており、濁水が頻発していた。60 (昭和35) 年には江戸川取水の金町浄水場 (葛飾区) の拡張工事で供給力の増

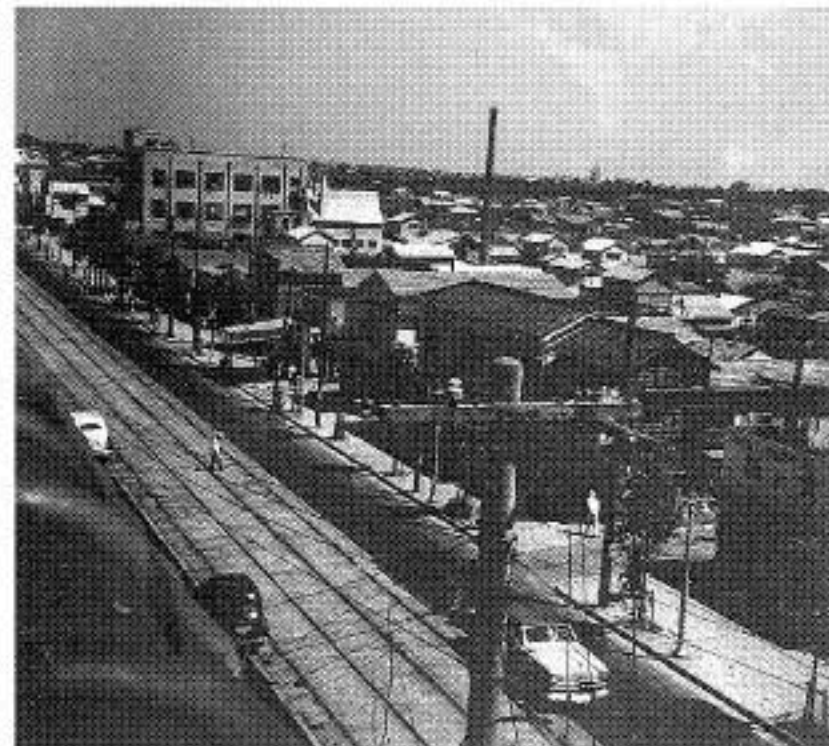
貧弱だった都市基盤

道路や上下水道、山積する課題

強が図られた。

しかし、63 (同38) 年とオリンピックが開催された64年も異常な水に見舞われ、断水・給水制限が繰り返された。「この夏の東京は異常な水飢饉であった。あとにも先にも、私はあれほどの水不足を知らない。オリンピックの年というので、すぐに断水を思い出すほどだ。」 (略) (東京砂漠) という不快な言葉はこの時に生じた (小林信彦・荒木経惟「私説東京警昌記」)

生活環境も現在の東京からは想像できないほど劣悪だった。「狭い道路に車があふれて排気ガスが充満しているだけでなく、騒音が街を包み、盛り場や住宅地もごみが散乱し、悪臭が鼻をつく街であった」 (同)。



オリンピック以前の青山通り。道幅は現在の半分、道路沿いに商店が並んでいた。山陽堂書店提供

かしい」と、オリンピックへ向けて「蚊とハエをなくす運動」が推進される。保健所、清掃事務所のほか、町内会の一般市民も協力して側溝の汚泥をきれい、公衆便所の清掃、各戸への便所用薬剤の配布などが行われた。東京都は62 (昭和37) 年10月から毎月10日を「首都美化デー」として、都民に町内清掃を呼びかけた。オリンピック開催1カ月前から終了までの期間、「道路、公園、河川を美しくする運動」も展開される。渋谷区では「オリンピックにはじけない公衆道徳を養おう」などのスローガンが掲げられた。

外人に見せないように図ったのである (前掲「東京オリンピックと渋谷、東京」)。「イベントに関連して都市改造が実行される最大の理由は、インフラ整備に対する財政的集中投資が国レベルにおいても自治体レベルにおいてもイベント開催時に限って正当化され、許容されるからである」 (前掲「東京都市計画物語」)

作家の小林信彦氏は東京改造を「町殺し」と呼んだ。「批判的言辞を口にしたとたんに『保守主義者!』とどやしつけられかねなかった空気が私のへ不安」になっていた。 (略) 反対する者は非国民——という図式が、すんなり信じられていた。立ち退きを拒む家は孤立し、狂人扱いされていた (前掲「私説東京警昌記」)

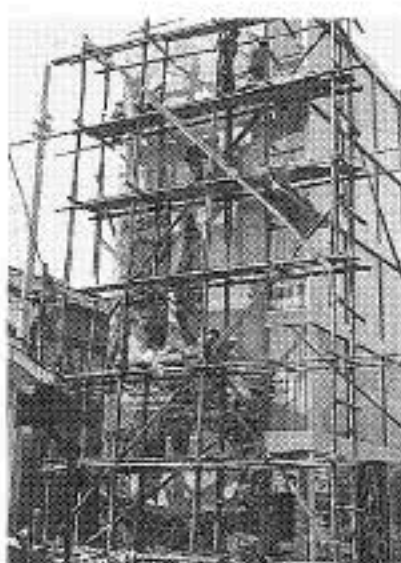
生まれ変わった街、景観は犠牲

いまはかなり浄化された隅田川も工場の廃液や汚水が流れこみ、硫化水素などの有毒ガスが立ち込め、たまごが腐ったような悪臭を放っていた。「外国からのお客さんに恥ず

大会前後に特別態勢を組んで行い、期間中はできるだけしないようにし、ゴミ収集も朝8時から早朝作業を実施することにした。「汲み取りやゴミ収集をオリンピック観光にやってくる内



建設中の首都高速道路 (赤坂見附付近、1964年6月)



道路拡幅のため山陽堂書店は建物を「削る」工事を実施一同書店提供

返され、つきつきと新しい町が出現していった」 (塩田潮「東京は燃えたか」)

計画のまま進められた。主会場と第2会場の駒沢公園を結ぶ青山通りは幅員が2倍の40mに拡張された。通り沿いの商店が立ち退きを強いられ、敷地を大幅に削られた。

昭和初期から青山通りに面した表参道交差点北側にある山陽堂書店は、道路拡幅の際に立ち退かず、建物を3分の2奥に削って店舗を残した。同店4代目の遠山秀子さんは「昔の青山通りは魚屋、肉屋、酒屋などが通りの両側に並ぶ商店街で、人が住む生活の場でした。道路工事のときは近くに代替地が用意されていたんですが、古くからのお客さんの助言もあって残ったようです。店舗は小さくなりましたが、この場所にとどまっていた」と話す。

首都高速道路は選手、役員を羽田空港から輸送する路線と位置づけられた1号線ははじめ4号線までが大会前に完成した。用地買収交渉の時間や費用を節約するため、河川、既設道路、公園などの公有地上を高架で通過するルートがとられた。悪評高い日本橋上の4号線分岐線な

遠見卓見



塩田 潮

オリンピックはインフラを整備された先進国による開催と、大会を契機に途上国から先進国へテイクオフしようという場合の2種類ある。64年の東京大会は典型的な途上国型だった。

集中投資する「途上国型」

後の地方都市の開発と生活環境整備のモデルになった。当時の政権関係者などを取材して意外だったのは、当初は都市改造という発想がほとんどなかったことだ。60年安保騒動で自民党は革新勢力の伸長におびえ、国民の不満を解消して二一ズをくみ取るのに必死で、大会開催や都市改造は支持確保の策という意識が強かった。

人々の「無関心」をよそに、東京改造工事はうなりを上げて進んでいた。「戦後の四十年間の東京の移り変わりを振り返って、この町がもっとも大きく変貌を遂げたのは東京オリンピックの前後だったと多くの人が強調する。」 (略) 東京中が掘り

準備委員会がとくに整備が急がれる道路を「オリンピック関連道路」と決定した。一般道路は合計30路線、全長約75キロに1070億円が投じられた (同)。

計画のまま進められた。主会場と第2会場の駒沢公園を結ぶ青山通りは幅員が2倍の40mに拡張された。通り沿いの商店が立ち退きを強いられ、敷地を大幅に削られた。

「オリンピックが終了した一月からは、再び都内の道路の三〇〇カ所が掘り返され穴だらけになった。とくに、一部だけ開通した首都高速道路に接続する一般道路の混雑はますますひどくなり、交通渋滞の慢性化をもたらした」 (『昭和二万日の全記録 第13巻』)